金島書

若州

只こと葉　永享六年五月四日都を出で、次日若州小浜と云泊に着きぬ。ここは先年も見たりし処なれども、今は老耄なれば定かならず、見れば江めぐりめぐりて、磯の山浪の雲と連なつて、伝へ聞く唐土の遠浦の帰帆とやらんも、かくこそと思ひ出られて、

歌う　船止むる、津田の入海見渡せば、津田の入海見渡せば、五月も早く橘の、昔こそ身の、若狭路と見えしものを、今は老の後背山。され共松は緑にて、木深き木末は気色だつ、青葉の山の夏陰の、海の匂ひに移ろひて、さすや潮も青浪の、さも底ひなき水際哉、さも底ひなき水際哉。

詠　青苔衣帯びて巌の肩にかかり、白雲帯に似て山の腰を廻ると、

歌　白楽天が詠めける、東の船西の船、出で入る月に影深き、潯陽の江のほとり、かく

やと思ひ知られたり。

海路

只うた　かくて順風時至りしかば、纜を解き船に乗り移り、海上に浮かむ。さるにても

佐渡の島までは、いかほどの海路やらんと尋ねしに、水手答ふるやう、遙遙の舟路なりと申しほどに、

下　遠くとも、君の御蔭に洩れてめや、八島の外も同じ海山。

上　今ぞ知る、聞くだに遠き佐渡の海に、老の波路の船の行末、万里の波濤におもむくも、

下くり　だだ一帆の道とかや、一葉の内には、干顆万徳のつうしよあり。

こせさは　げにや世の中は、何にたとゑん朝ぼらけ、漕ぎ行船の路もはや、幾瀬の波を越えぬらん、北海漫漫として、雲中に一島なし、東を遙に見渡せば、五月雨の空ながら、その一方は夏もなき、雪の白山ほの見えて、雪間や遠く残らん。なを行末も旅衣、能登の名に負ふ国つ神、珠洲の岬や七島の、海岸遙かにうつろひて、入日を洗ふ沖つ波、そのまま暮れて夕闇の、螢とも見る漁火や、夜の浦をも知らすらん。　上　たなびく雲の立山や、明け行天の砺波山、倶利伽羅峰までも、それぞとばかり三越路の、船遙遙と漕ぎ渡る、末有明の浦の名も、月をそなたの知るべにて、浪の夜昼行船の、去ること早き年の矢の、下の弓張の月もはや、曙の波に松見えて、早くぞ爰に岸影の、爰はと問ば佐渡の海、大田の浦に着にけり、大田の浦に着にけり。

　　　配処

【只こと葉】その夜は大田の浦に留まり、海士の庵の磯枕して、明くれば山路を分け登りて、笠かりと云峠に着きて駒を休めたり。ここは都にても聞きし名所なれば、山はいかでか紅葉しぬらんと、夏山楓の病葉までも、心ある様に思ひ染めてき。そのまま山路を降り下れば、長谷と申て観音の霊地わたらせ給。故郷にても聞きし名仏にてわたらせ給へば、ねんごろに礼拝して、その夜は雑太の郡、新保と云ところに着きぬ。国の守の代官受け取りて、万福寺と申小院に宿せさせたり。この寺の有様、後には巌松むら立て、来ぬ秋誘ふ山風の、庭の木末に音づれて、陰は涼しき遣り水の、苔を伝いて岩垣の、露も雫も滑らかにて、まことに星霜古りける有様也。御本尊は薬師の霊仏にてわたらせ給よし、主の御僧の仰せられしほどに、いとど有難き心地して、

【下歌】我之名号の春の花、十悪の里までも匂ひをなし、衆病悉除の秋の月、五濁の

水に宿るなる、誓ひの陰もあらたにて、庭の遣り水の、月にも澄むは心也。

上　しばし身を、奥津城処ここながら、奥津城処ここながら、月は都の雲居ぞと、思ひ慰む斗こそ、老の寝覚の便りなれ。げにや罪なくて、配所の月を見る事は、古人の望みなるものを、身にも心のあるやらん、身にも心のあるやらん。

時鳥

只ことば　さて西の方を見れば、入海の浪白砂雪を帯びて、みな白妙に見えたる中に、松林一むら見えて、まことに春六月の気色なるべし。この内に社頭まします、八幡宮勧請の霊祠也、されば所をも八幡と申。敬信のために参詣せしに、爰に不思議なる事あり。都にては待ち聞きし時鳥、この国にては山路は申にをよばず、かりそめの宿の木末、軒の松が枝までも、耳かしましきほどなるが、この社にてはさらに鳴く事なし。これはいかにと尋ねしに、宮人申やう、これはいにしへ為兼の卿の御配処也、ある時ほととぎすの嗚くを聞き給て、鳴けば聞く、聞けば都の恋しきに、この里過ぎよ山ほととぎすと詠ませ給しより、音を止めてさらに鳴く事なしと申。げにや花に鳴く鶯、水に住む蛙まで、歌を詠む事まことなれば、ほととぎすも同じ鳥類にて、などか心のなかるべきと覚えたり。

上歌う　落花曲旧りて、郭公はじめて鳴き、名月秋を送りては、松下に雪を見ると、古き詩にも見えたれば、折を得たりや時の鳥、都鳥にも聞くなれば、声もなつかしほととぎす、ただ鳴けや鳴け老の身、われにも故郷を泣くものを、われにも故郷を泣くものを。

　　　泉

只言葉　又西の山本を見れば、人家甍を並べ都と見ゑたり、泉と申ところなり。これは

いにしへ順徳院の御配処也。しかれば御製にも、限りあれば萱が軒端の月も見つ、知らぬは人の行末の空。げにや十善万乗の御聖体、さしも余薫の御蔭とて、その名も高き山桜、梢の花と栄えん、雲居の春ののどけさも、いまさもして天離る、鄙の長路の御住まひ、思ひやられていたわしや。所は萓が軒端の草、忍の簾絶え絶え也。

下歌う　夕立落つる庭たづみ、これもや泉なるらん。

上　下くぐる、水に秋こそ通ふらし、水に秋こそ通ふらし、結ぶ泉の、手さへ涼しき折折に、御衣の袂や萎れけん。げにや人ならぬ、岩木もさらに悲しきは、美豆の小島の秋の夕暮と、詠めさせ給しも、御身の上となりにけり。

下　樒摘む、山路の露に濡れにけり、暁起きの墨染の、袖も同じ苔筵の、たれぞ錦の、御褥ならんいたわしや。

上　薪こる、遠山人は帰る也、里まで送れ、秋の三日月も雲の端に、光の陰の憂き世をば、君とても逃れ給はめや。さてこそ言ふならく、奈落の底に入ぬれば、刹利も首陀も、変らざりけるとなり。げにや蓮葉の、濁りに染まぬ心もて、泉の水も君すまば、涼しき道となりぬべし、涼しき道となりぬべし。

　　　十社

只こと葉　かくて国に戦をこりて国中おだやかならず、配処も合戦の巷になりしかば、在所を変へて今の泉といふ所に宿す。さるほどに秋去り冬暮れて、永享七年の春にもなりぬ。爰は当国十社の神まします、敬信のために一曲を法楽す。

さしごと　それ人は天下の神物たり、宜禰が慣らはしによりて威光を増し、五衰の眠りを無上正覚の月に覚まし、衆生らも息災延命と、守らせ給御誓ひ、げに有難き御影かな。

下　神のまにまに詣で来て、歩みを運ぶ宮廻り。

上　げにや和光同塵は、げにや和光同塵は、結縁の御初め、八相成道は、利物の終りなるべしや。まこと秋津洲のうちこそ、御代の光や玉垣の、国豊かにて久年を、楽む民の時代とて、げに九の春久に、十の社は曇りなや、十の社は曇りなや。

北山

只こと　かくて古き人に会いて、当国の神秘けいかい尋ねおくりなり。

上う　抑わが朝秋津洲と申は、粟散辺土の小国なりと申せども、天地開闢の国にして、天照大神の御末、正しく日統をいただく事今に絶えせず。

さし事　しかれば国の名を問へば、神道において様様也、まづ大日本国とは、青海原の海底に、大日の金文現はれ給しより、後代に名付けし国とかや。しばらくこれを惟れば、その品品も一ならぬ、八島の浪のよりよりに、粗粗語り申べし。

曲舞　その初めを惟れば、天祖の御譲り、天の浮橋より、光さしをろす矛まの、国の淡路を初めとして、あれは南海、これは北海の佐渡の島、胎金両部を具へて、南北に浮かむ。海上の、四涯を守る七葉の、金の蓮の上よりも、浮かみ出で立つ国として、神の父母とも、この両島を云とかや。されば北野の御製にも、かの海に、金の島のあるなるを、その名と問へば佐渡と云也、この御神詠もあらたにて、妙なる国の名も久し。　上う　しかれば伊弉諾伊弉冊の、その神の代の今ことに、御影を分て伊弉諾は、熊野の権現とあらはれ、南山の雲に種蒔きて、国家を治め給へば、伊弉冊は、白山権現と示現し、北海に種を収めつつ、菩提涅槃の月影、この佐渡の国や北山、毎月毎日の影向も、今に絶ゑせねば、国土豊かに民厚き、雲の白山も伊弉冊も、治まる佐渡の海とかや。　下　抑かかる霊国、かりそめながら身を置くも、いつの他生の縁ならん。よしや我雲水の、すむにまかせてそのままに、衆生諸仏も相犯さず、山はをのづから高く、海はをのづから深し、語り尽くす、山雲海月の心、あら面白や佐渡の海、満目青山、なををのづから、その名を問へば佐渡といふ、金の島ぞ妙なる。

薪の神事

さし事　夫治まれる代の声は安んじて以て楽しめり、これまことにその政事やはらげば也。天地を動かし鬼人を感ぜしむ。

曲舞　二月の、初申なれや春日山、峰響むまで、いただきまつると詠ぜしは、げにも故ある道とかや。又二月や、雪間を分けし春日野の、置く霜月も神祭の、今に絶えせぬは、国安楽の神慮也。しかれば小忌衣、二月第二の日、この宮寺に参勤し、翁の歌をうたふも、さぞ御納受はあるらん。　上　しかれば興福寺の、西金東金の、両堂の法事にも、まづ遊楽の舞歌をととのへ、万歳を祈り奉り、国富み民も豊かなる、春を迎へて年を積む、薪の神事これなりや、されば北野の天神も、名は大唐に留まり、会は興福に納まるとの、御願文もあらたにて、十二大会の初めにも、この遊楽をなす事の、当代の今に至るまで、目前あらたなる、神道の末ぞ久しき。

これを見ん残す金の島千鳥跡も朽ちせぬ世世のしるしに

永享八年二月日　　　　　　　　　　　　　　　沙弥善芳